

## 恥および罪悪感とは何か : その定義, 機能, 発達とは

久崎, 孝浩  
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/867>

---

出版情報 : 九州大学心理学研究. 3, pp.69-76, 2002-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# 恥および罪悪感とは何か

—その定義, 機能, 発達とは—

久崎 孝浩 九州大学大学院人間環境学府

## What is shame and guilt — its definition, function, and development —

Takahiro Hisazaki (*Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Human beings don't randomly arouse emotions, but sometimes arouse emotions under consciousness concerning how they are recognized by others and meet expectations in others or rules in social groups. Emotions participated consciousness what oneself ought to be, especially shame and guilt have recently been paid considerable attention. So, I discussed appraisals, emotional experience, physiological reaction, and emotional expression of shame and guilt from the latest findings, and I tried to define them. Secondly, I inscribed the differences between shame and guilt in terms of emotion function. Finally, I discuss how and when shame and guilt appear, referring to Lewis's emotion development theory.

**Keywords:** difference between shame and guilt, emotion function, Lewis' emotion development theory

人はある種の事象に晒されてただやみくもに情動を発動させる存在ではない。自分自身は他者からどのようにみられ、他者の期待に込んでいるのか、また、自分自身が社会集団の規範をどのように満たしているかという意識の下に、事象に直面しなければならない場合もある。殊に、ある特定の事象に他者の利益や集団の規範が絡む場合には、そのような意識の介在もなく自分自身の利益ゆえにむやみやたらに怒り、恐れ、悲しみといった情動を発動させれば、他者との関係の破綻を招く、あるいは社会集団から取り残されることになるかもしれない。

こうした意識の介在は、人間が他者との密接な関係や社会集団を形成・維持していかなければ生きていけないことを暗示するものかもしれないが、発達心理学においては“自己意識”(self-consciousness)として記述され、この自己意識の介在の下で発動される複雑な情動は、“自己意識的情動”(self-conscious emotion)として記載されてきた。その中でもとりわけ、“恥”(shame)および“罪悪感”(guilt)という2種の情動の性質をめぐっては大いに議論されてきた。それは、恥と罪悪感が、一見すると互いに区別しがたい情動であるにもかかわらず、近年、進行中の社会的相互交渉において別個に機能していることが見出されてきたからである。そこで、現在までに提出されている見解や知見を参照しながら、まず、混同しやすい概念である恥と罪悪感それぞれの特質について概観し、恥と罪悪感それぞれの定義と機能について取りまとめることにしたい。また、恥および罪悪感という情動は、人間が社会的に自律した存在であるという人間の本質を自ずと感じさせるものである。それゆえ、発達

心理学領域の主要なテーマの一つである、子どもの社会的自律への移行を考えると、恥および罪悪感の発達について議論することは非常に重要であろう。そこで、本論では、Lewisの情動発達理論を紹介しつつ、恥および罪悪感の発達についても議論することにした。

### 1. 恥および罪悪感はいかに定義されるか

これから議論を進めていくにあたって、恥および罪悪感を定義する必要があるだろう。一般的に、多くの研究者は、恥と罪悪感を、情動として認めており、その情動のうちでも自己意識的情動であるとしている(e.g., Barrett, 1995; Eisenberg, 2000; Fischer & Tangney, 1995; Lewis, 1992, 1999)。そこで、まずは、情動とは何か、さらに自己意識的情動とは何かを定義しなければならないだろう。

情動という概念は現在までに幾らかの変遷を遂げてきたが、近年の多くの研究者の一致するところに従えば、次のように定義することができるだろう。情動とは、ある事象に対する“評価”(appraisal)によって主観的経験的側面(情動経験)、神経生理学的側面(情動状態)、行動表出的側面(情動表出)という3つの“反応”要素が不可分に連動して生じる複雑な“プロセス”である(e.g., Frijda, 1986; 遠藤, 1996)。

自己意識的情動とは字義どおり自己意識が関与する情動ということであるが、そうしたことを言い始めたのはPlutchik(1980)という研究者である。彼は、生得的で神経的に組み込まれた基本情動と、そうでない複雑な情動

を区分する原則の一つとして、自分は他者からどのように見られているかといった自己への内省あるいは自己意識を仮定している。そのような仮定を受け入れるならば、自己意識的情動を、ある事象に遭遇して自己について内省することに伴う情動であると定義することができるだろう (e.g., Lewis, 1992)。近年の多くの研究者が、喜び、悲しみ、怒り、恐れなどといった自己意識の関与しない原初的情動と、それとは質的に異なる自己意識的情動とを区別するに至っている (e.g., Barrett, 1995; Lewis, 1992; Tangney, 1999)。

上述を踏まえたくて、次に、恥と罪悪感の定義に関する議論に移りたい。恥と罪悪感、一見すると非常に類似した情動であり、その違いについては長いこと議論されてきた。しかし、恥と罪悪感それぞれの性質間の差異は、現在までに提示されている恥と罪悪感に関する見解や知見を参照することで、恥と罪悪感それぞれの発動に際する認知的評価および反応（主観的経験、神経生理学的変化、表出・行動の3つの反応要素を含む）という側面に見出すことができるのではないだろうか。そこで、以下では、恥と罪悪感それぞれの発動に際する認知的評価および反応について記述したい。

①事象に対する認知的評価と恥および罪悪感 そもそも、恥と罪悪感の差異を決定するものとして、それらの情動が喚起される事象の性質を考えることができるかもしれない。そうした観点から、多くの研究者が、恥と罪悪感それぞれを喚起させる事象の性質について検討してきた (e.g., Keltner & Buswell, 1996; Olthof, Schouten, Kuiper, Stegge, & Jennekens-Schinkel, 2000; Tangney, Miller, Flicker, & Barlow, 1996)。例えば、Benedict (1946) や Gehm & Scherer (1988) は恥と罪悪感の喚起の差異が自ら失敗をした際の周囲の状況（“公的” [public] な状況と、“私的” [private] な状況のどちら）に依存するのか、また Keltner & Buswell (1996) や Olthof et al. (2000) は失敗自体の質によるのかを検討している。しかし、現在のところ、恥と罪悪感それぞれに特有の事象が存在することを示す証拠は見出されていない。むしろ、恥と罪悪感の“同時生起” (co-occurrence)、すなわちある種の失敗において恥が生起する場合もあれば、罪悪感が生起する場合もありうることを想定しておくのが賢明であるかもしれない (e.g., Barrett, Zahn-Waxler, & Cole, 1993)。

そのような仮定が成り立つのであれば、恥と罪悪感の差異は、失敗に対する評価の様式の差異を反映していると考えるのが妥当であると言えよう。例えば、成績の悪かったテストの用紙が親に見つかった場合に、ある子どもはテストの成績の悪さを自分の知的能力のせいであると評価して恥を経験し、俯いて肩を落とすかもしれない。またある子どもは、同じ状況においても、テストの成績の悪さを自分がテスト前日に勉強をしなかつ

たせいであると評価して罪悪感を経験し、テスト前に勉強することを親と約束するかもしれないということはあるだろう。このような考えに一致するものとして失敗の原因を、“全体的”に帰属（身体的・物理的特徴といった自己の安定した側面に帰属）した場合に恥が、“特異的”に帰属（失敗の原因となる行為といった自己の特異的な側面に帰属）した場合に罪悪感が惹起されるという見方がある (H.B. Lewis, 1971; M. Lewis, 1992)。こうした見方は、実際、事例を質的に分析した研究 (e.g., H.B. Lewis, 1971)、恥と罪悪感について被験者が語ったものの内容を分析した研究 (e.g., Ferguson, Stegge, & Damhuis, 1990; Tangney, 1993)、被験者が自身の恥と罪悪感の経験を量的に評定したものを分析した研究 (e.g., Ferguson, Stegge, & Damhuis, 1991; Tangney, 1993)、そして恥と罪悪感を喚起させるような仮想条件に対して被験者がどのように思考するかを分析した研究 (Niedenthal, Tangney, & Gavanski, 1994) によって、ある程度の支持を受けている。

②恥と罪悪感の主観的経験的側面 人は恥と罪悪感それぞれを喚起した場合に、どのような主観的経験を抱くのであろうか。多くの研究者は、人は恥の喚起においては、強烈な苦痛、身体が小さくなった感じ、他者あるいはその場から逃げたいという願望を、罪悪感の喚起においては、恥に比してそれほど強烈でない苦痛、逃げたいというよりも自分の過ちを取り消したいという願望を経験するだろうと想定している (Barrett et al., 1993; Lewis, 1992; Mascolo & Fitcher, 1995; Tangney, 1999)。実際、実証研究において、多くの研究者が、上述にあるような恥と罪悪感の主観的経験の差異を明らかにしている (Tangney, 1993; Tangney et al., 1996; Wicker, Payne, & Morgan, 1983)。

③恥と罪悪感の神経生理学的側面 恥と罪悪感それぞれが喚起した場合に、どのような神経生理学的な変化が連動するのであろうか。ある研究者たちは、恥と罪悪感それぞれの神経生理学的変化を、各々の情動に特有の行為の準備状態に導くものとして想定している (e.g., Barrett, 1995; Mascolo & Fitcher, 1995)。例えば、次の行動の発動の準備として、恥の場合には心臓の拍動が減少し、罪悪感の場合には心拍が増加するというのである。しかし、現在のところ、こうした仮説は実証されていないため、心拍などを含めた神経生理学的指標の検討は今後に期待される場所である。

④恥と罪悪感の表出・行動的側面 多くの研究者は、ある固有の表情を、怒り、恐れ、喜びなどの情動に対して割り当てることが可能であるとしてきた (e.g., Ekman & Friesen, 1975; Izard, 1971, Lewis, 1992)。しかし、恥と罪悪感それぞれに特有の表情が存在すると考えている研究者は殆どいないようである (e.g., Barrett, 1995; Izard &

Malatesta, 1987; Lewis, 1992; Ortony & Turner, 1990; Scherer, 1986)。それは、表情の表出は社会化の影響を受けやすく、現実には、表情と内的状態との対応関係、ここで言えば、表情と恥あるいは罪悪感との対応関係が存在しないことが分かっているからである (e.g., Lewis, 1992; Lewis & Michalson, 1983)。Darwin (1965) は恥が赤面と結びついていることを述べているが、Lewis (1992) によれば、赤面は恥だけでなく罪悪感にも見られるという。また、表情以外に、発声パターンも情動を特定する拠りどころになるが、恥と罪悪感を明確に区別し得る特定の発声パターンを想定することは不可能のようである (e.g., Barrett, 1995; Scherer, 1986)。以上の論から、伝統的に情動を特定する指標として用いられてきた表情や発声といったパターンにおいては、恥と罪悪感を区別することは不可能であることが分かるであろう。一方、情動に附随する行動に関しては、多くの研究者が、人は恥を喚起した場合には他者から引きこもり、他者の視線を免れようとする行動を引き起こすが、罪悪感を喚起した場合には恥の場合とは対照的に、他者から引きこもることなく、修正的な行為を示したり、他者に自分の失敗を提示したりすると想定している (e.g., Barrett, 1995; Barrett et al., 1993; Lewis, 1992; Mascolo & Fitcher, 1995)。実際、多くの研究で、幼い子どもが何らかの失敗をしてしまったときに、上述にあるような、恥と罪悪感それぞれに関連する行動が観察されている (e.g., Barrett et al., 1993; Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner, & Chapman, 1992; Stipek, Recchia, & McClintic, 1992)。このようなことから、失敗に対する行動を観察・分析することは、恥と罪悪感それぞれの喚起を検出する重要な方法であると思われる。

⑤恥と罪悪感の3側面間の連関構造 さて、先に記したように、情動は、主観的経験的側面、神経生理学的側面、表出・行動的側面の3要素が絡み合うプロセスである。そして、②から④では恥と罪悪感それぞれの情動3要素について研究者たちがどのように把握しているかを記述してきた。それでは、それら要素間はいかなる連関構造をなしているのだろうか。これまでの記述から当然想定されるのは、例えばある人が恥を喚起した場合、その人は、心拍の減少に連動して、他者の視線を免れるような行動を引き起こし、また恥を喚起したときの自分自身の内的経験を振り返ったときには、身体が重くなったように感じた、あるいは隠れたいと思ったなどと言明するであろうということである。しかし、現在までに、こうした連関についての検討はなされていないようである。

これまでを振り返ると、恥と罪悪感に関して、情動の性質に関する幾つか点で実際検討されていないという問題が散在するものの、先論に従って、以下のように定義

することが可能ではないかと思われる。恥は、ある種の失敗を自己の安定した側面に帰属することによって発動し、強烈な苦痛、身体が重いあるいは縮小する、隠れたいといった主観的経験的側面、心拍の減少といった神経生理学的側面、他者の視線を免れるような表出・行動的側面の3つの要素が絡み合って生じるプロセスである。罪悪感も、恥と同様にある種の失敗を自己の特異的な側面に帰属することによって発動するが、恥とは対照的に、それほど強烈でない苦痛、身体が重い、申し訳ないといった主観的経験的側面、心拍の増加といった神経生理学的側面、失敗に対する修正的行動や失敗を他者に提示する行動などといった表出・行動的側面の3つの要素が絡み合って生じるプロセスである。

## 2. 恥および罪悪感はいかなる機能を有するか

前章は、事象に対する認知的評価およびそれに附随する反応という観点から、恥と罪悪感それぞれの定義を試みるものであった。

ところで、近年のある研究者たちによれば、情動は、他者を含む環境との関係を確立、維持、崩壊するという“機能”(function)を備えているという (e.g., Campos, Campos, & Barrett, 1989; Frank, 1988; Frijda, 1986; Johnson-Laird & Oatley, 2000)。さらに、Johnson-Laird & Oatley (2000) は、人間の情動は、特定の環境に対する固定的で反射的な行動パターンを合理的に備えた“生き残りシステム”ではないかとしている。例えば、悲しみという情動の場合、その生起が、悲しみの表情や泣きを駆り立て、それらに要する身体状態を調整し、他者からの保護や慰撫を引き出すといった具合に、とっさに生じる情動が生存のために環境と個体の関係を即座に調整するというのである。また、Frank (1988) によれば、恥や罪悪感などの場合には、生き残りシステムのような“現時点”の機能だけでなく、“近未来における社会的適応”という機能を備えているという。換言すれば、恥や罪悪感といった情動は、むやみな自己利益追求にブレーキをかけ、あえて利益にならない行動を動機づけることを通して、近未来における個体の成功を保証するということである。そこで、本章では、恥と罪悪感がいかなる機能を有しているのかについて触れることにしたい。

①恥の機能 Barrett (1995) によると、恥と罪悪感とは、前節に見た認知的評価や反応における差異に加えて、機能的側面においても差異があるという。彼女は情動の機能に関して、“行動制御機能”(behavioral regulatory function)、“個体内制御機能”(internal regulatory function)、“社会的制御機能”(social regulatory function)の3つの側面を想定している。恥の場合には、行動制御機能として、恥が、恥を経験している個人を、評価的な他者から

晒されることを避けるような行動に駆り立て、社会的制御機能として、そうした行動が、自分自身が小さく無力な存在で、評価的な他者あるいは規範に対して服従するという周囲に伝達するというのである。そして、個体内制御機能として、恥は、道徳的な規範や達成的目標に反するような行いをした個人に情動的苦痛を与えることで、規範や目標がいかに重要であるかをその個人に知らしめ、さらには、恥によって、他者（あるいは内なる他者）からいかに見られているかに関する注意を喚起することを通して、その個人は“客体としての自己”に関する知識を獲得していくというのである。

②**罪悪感の機能** 恥とは対照的に、罪悪感は、行動制御機能として、罪悪感を体験している個人を、自らの過失が他者に及ぼした害悪を修復するような行動、あるいはその過失を他者に告白するような行動に駆り立て、社会的制御機能として、そうした行動が、その個人がその過失に関与する規範を以後も順守するつもりでいるということを他者に伝達するというのである。そして、個体内制御機能として、罪悪感によって、その個人は規範が重要であることを知るだけでなく、さらに、“客体としての自己”よりも“主体としての自己”に関する知識を獲得していくというのである。主体としての自己に関する知識の獲得というのは、罪悪感を体験している個人が、自らの失敗に対する修復に駆り立てられてその状況を調整するという経験を積み重ねることによって、たとえ自ら失敗を起こしたとしても自らの修復行動によってその失敗を取り消しにすることが可能であるという感覚を学習していくということである。

以上のように、情動の機能という側面から恥と罪悪感を眺めてみると、両情動は、ある種の失敗に対して同時生起する可能性があるにもかかわらず、他者との関係あるいは相互交渉を破綻させるかそれとも回復し維持させるかという点で、また個体の客体的側面に焦点化するかそれとも主体的側面に焦点化するかという点で、かなりの相異を見せるものと言えるだろう。

尚、前者の点において恥と罪悪感が対照的に異なることは、罪悪感特性<sup>1)</sup>の高い個人は他者に対して“同情的反応”(sympathetic response)<sup>2)</sup>を示しやすく、怒りを建設的に抑制する傾向があるのに対し、恥特性の高い個人は他者に対して同情的反応よりも“個人的苦痛”(personal distress)を示しやすく、怒りや敵意を体験しやすいという実証的知見(e.g., Tangney, 1995; Tangney, Wagner, Fletcher, & Gramzow, 1992)からも明らかであろう。

### 3. 恥と罪悪感の発達プロセスについて

第一章でも述べたが、恥と罪悪感はある種の失敗の原

因が自分にあると評価することによって生じるということであった。このことは、自分自身の行動や特性を客観的に見つめるという認知的活動がなければ恥と罪悪感が生じないということを意味する。発達という観点でみれば、ある発達段階になってそうした認知活動が可能になることで、恥と罪悪感を体験し始めるということが考えられるわけである。そこで、本章では、情動発達プロセスの中で、恥と罪悪感がいつ、いかなるかたちで芽生え始めるのかについて考えてみたい。現在のところ、各種情動がいついかなるかたちで発達していくかということに関しては、未だ統一の見解を得るに至っていない。その主たる原因は、乳幼児の情動表出が真の情動状態(内的状態)を反映しているかを検証することが不可能なところにある(遠藤, 1995)。そうした現状においても、特に自己意識的情動の発達を示唆するものとして、Lewis(1992, 1999)のモデルを紹介したい。彼は、基本的に、各種情動が、運動、認知、および自己の発達と密接に絡み合いながら漸次的に分岐し構成されてくると考えている。

Lewis(1992)によれば、“自己意識”(自己あるいは内なる他者の観点から事象を評価すること)が成立する1歳半ば頃から、喜び、悲しみ、怒り、恐れなどの原初的情動とは一線を画す、困惑(自己が他者から注視されることによって喚起される情動で、“てれ”と言ってもよいであろう)、共感、羨望が現出し始めるという<sup>3)</sup>。実際、自己意識(自己鏡映像認知)が成立しない限り困惑あるいは共感等は現出し得ないことを示唆する幾つかの研究がある(Bischof-Coehler, 1988, 1994; Lewis, Sullivan, Stanger, & Weiss, 1989; Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, et al., 1992)。

<sup>1)</sup> 情動特性の補完的概念として“情動閾値”(emotional threshold)というものがある(Izard, 1991)。これは、ある特定の情動の閾値が低ければ、日常において頻繁にその情動を体験するということである。

<sup>2)</sup> 共感とは、他者の情動状態の理解を通じて、その他者と同類の情動状態を体験するということである(e.g., Eisenberg, 2000)。特に、他者の苦痛あるいは苦境に対する共感における反応は、同情と個人的苦痛に大別される。同情は、自分自身を他者の立場におくことによって喚起し、他者への関心や悲しみといった情動を伴い、他者の不快の低減を試みる他者志向的な(other-oriented)反応であるのに対し、個人的苦痛は、不快や不安といった情動的苦痛を伴う自己焦点的な(self-focused)反応である(Batson, 1991; Eisenberg & Fabes, 1991)。

<sup>3)</sup> Lewisは、自己に焦点化した行動、自己言及的発語、そして鏡像などにおける自己の客体的特徴の認識の成立を、自己意識の現れとしている。また、Lewisは、共感を、他者と同類の情動状態を経験しているという情動状態にあると見なしていることから、情動の一種と考えている。そして、Batson(1991)やEisenberg(2000)などが言う同情的反応を、Lewisの場合は共感としているようである。さらに、Lewisは、羨望を、他者の所有している物を自分のために得たいという自己意識的な願望であるとして、1歳半ば頃に現出するとしている。しかし、これについての確証は現在のところ得られていない。

例えば、Lewis et al. (1989) は、平均22ヶ月の子どもを、自己鏡映像における口紅課題を通過するか否かによって自己意識成立群と不成立群に分け、各群が困惑を喚起させるような4つ場面で困惑を表出するかどうかを分析している。その結果、困惑を表出した子ども的人数は、自己意識不成立群よりも成立群の方が多いことが分かっている。また、Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, et al. (1992) は、生後13ヶ月から25ヶ月の子どもが他者に苦痛に対して示す多種の反応と、Bertenthal & Fischer (1978) に基づいて測定される自己意識レベルとの関連性を検討している。その結果、生後23ヶ月から25ヶ月の子どもにおいて、自己意識レベルの高い子どもは他者の苦痛の低減を試みようとする行動、つまり共感を反映した行動を多く示すことが分かっている。

そして、2歳半ば以降、“自己評価”(ある規範や目標に照らして自分がよいか悪いかを判断すること)が可能になるに従って、恥、誇り、困惑(Lewisは困惑を、自己意識によって喚起される情動と、自己評価によって喚起される情動を区別しており、ここでは特に後者のマイルドな恥として困惑を想定して述べている)が芽生え始めるという<sup>4)</sup>。現に、幾つかの研究は、ある課題を用いることで、恥、誇りといった情動の発動が自己評価無くしてはありえないことを示唆している(Lewis, Alassadri, & Sullivan, 1992; Stipek et al., 1992)。例えば、Lewis et al. (1992) は、生後36ヶ月の子どもが難度の低い課題と難度の高い課題それぞれに失敗した際の反応を観察している。そして、子どもは、難度の高い課題に失敗したときには恥反応(恥に関連する5つの行動のうち3つを示した場合に恥と見なす; Geppert, 1986)をあまり示すことなく悲しみを顕わにするが、難度の低い課題に失敗したときには悲しみだけでなく恥反応も多く示すことが見出されている。難度の高い課題では、自分にとってその課題を達成するのが難しいことを予期していたため、失敗の原因が自分にあるといった自己評価には至らないが、難度の低い課題では、自分はその課題を達成することは可能であるという目標を自分に掲げるために、失敗の原因が自分にあるといった自己評価に至ったものと思われる。このことを踏まえれば、彼らの結果は、自己評価と恥の強い結びつきを物語るものと言えよう。一方、幾つかの研究では、3歳児が課題の遂行に失敗して母親にそ

の課題を見せる行動や(Stipek et al., 1992)、2歳児が他者の所有物を壊してその他者に壊した物を見せたり、修復しようとしたりする行動(Barrett et al., 1993)が観察されている。これらの行動は、その先行事象(先行事象は、Stipek et al. の研究で言えば、母親の目で課題遂行に失敗してしまうということ、Barrett et al. で言えば、他者の所有物を壊したことがその他者に見られてしまうということになる)を考えれば、罪悪感を反映していると考えられなくもないが、自己評価によってこれらの行動が発現したと言うことはできないだろう。そのようなわけで、現段階において、これらの観察データから、罪悪感が発達上およそ2歳半ば頃には出現している可能性を論じることは可能かもしれないが、罪悪感が規範や目標に沿った自己評価によって発現し得ると明言することはできないようである。

それでは、この自己評価はいかなるプロセスとして在るのだろうか。Lewis (1999) によると、自己評価プロセスには、①他者や社会集団の基準や目標の覚知、②その基準や目標の取り入れ、③その基準や目標に基づいた自分自身の行動の評価、④自分自身と他者のどちらに非があるかの判断、そして、⑤自分自身の安定した側面あるいは特異的な側面への帰属、という複数の認知要素の発達が不可欠であるという。後者の3つは、自己の行為、自己を含む因果性、そして自己の客観的特質を、認識している必要があり、これらは自己意識の発達と関連の深いものといえる。前者の2つは、基準や目標の内在化に関わるものといえる。Lewis (1992) によれば、自己意識だけでなく、この基準や目標の内在化が、恥、罪悪感、誇りといった“自己評価的情動”(self-evaluative emotion)にとって必須であり、基準や目標の内在化プロセスについて、次のように説明している。基準や目標の内在化は、2段階の過程を経る。はじめは他者の基準や目標に従うことでそれらを受け入れるが、未だ内在化には至っていない。しかし、自己意識の現出によって、自分がどのようなことをすると自分自身あるいは他者を楽しませたり悲しませたりするかを客観的に理解することが可能になり、自ら基準や目標を形成し、表象化した形で取り入れる。こうしてみると、諸々の認知要素が絡み合う自己評価能力あるいは自己評価的情動の現出は自己意識の成立なくしてはあり得ないものと言えよう。しかしながら、この自己評価プロセスモデルは、未だ仮説の域を出ないものであることに留意されたい。

ところで、Lewisは、1歳半ば頃に現出する困惑および共感と2歳半ば頃に現出する恥および罪悪感との関係について、さらにユニークな論を展開している。彼によると、内在化された基準や目標を適用することによって、困惑は恥に、共感には罪悪感に変換されるという。Zahn-Waxler & Radke-Yarrow (1990) も、罪悪感に関しては同

<sup>4)</sup> Lewis以外の研究者たち(Kagan, 1984; Rehm & Carter, 1990)は、恥が2歳半ば頃に現出し、その後罪悪感が現出すると主張している。例えば、Rehm & Carter (1990)は、全体的帰属が特異的帰属よりも先に現出するとしている。これが正しければ、恥は罪悪感よりも先行して現出すると言えるだろう。しかし、恥が罪悪感よりも先行して現出するという証拠は現在のところ見出されおらず、むしろ、罪悪感には2歳以降から現出しはじめることを示す研究結果のほうが多い(e.g., Barrett et al., 1993; Zahn-Waxler, Radke-Yarrow et al. 1992)。

様のことを指摘している。先でも述べたが、罪悪感特性の高い個人は共感的であるが、恥特性の高い個人は共感的でないこと (e.g., Tangen, 1995), また、気難しい気質を備えた2歳の子どもは困惑を示しやすく、そのような子どもは3歳になると、失敗に対して恥をより示しやすいこと (Lewis, 1992) 鑑みれば、共感から罪悪感への変換、また困惑から恥への変換という可能性は存在するのかもしれない。

以上のように、Lewisの情動発達理論に沿って、恥および罪悪感がいつ、いかなるかたちで出現するのかについて述べ、それに関わる実証的研究を紹介した。端的に述べると、理論的に、恥および罪悪感、社会的基準や目標を内在化し、それらに沿って自己を評価することが可能になる2歳半以降に出現し始めるということであった。そして、そのような発達に関する実証研究において、Lewis et al. (1992) によって、3歳児において恥反応に自己評価が関与していることが示唆されている。罪悪感については、現在のところ、これと同様の示唆を与える知見は存在しない。また、Lewis et al. (1992) の研究は、実際のところ、難度の異なる課題に対する反応を明らかにしているだけで、恥の表出が課題目標の内在化に基づくのかどうかということまでは明らかにしてはいない。こうした疑問に従えば、自己評価プロセスモデルの検討と併せて、恥および罪悪感が内化された規範や目標に沿った自己評価に基づいて発現するのか、また、規範や目標の内在化に関連した認知能力の発達が恥および罪悪感の出現に影響するのかを今後更に検討していく必要があるだろう。

また、Lewisは共感と罪悪感、および困惑と恥の間に互換的関係が存在するという興味深い論を展開しているが、発達プロセスにおいて、あるいは恥状態から困惑状態へという情動状態の変換過程において、そのような互換的関係を強力に示唆する知見は現段階において未だ存在しないようである。今後、こうした点についても検討していく必要があるだろう。

## 結 び

本論では、まず、対人的環境において身近に感じられるが、なかなか区別して理解することの難しい情動である、恥と罪悪感がいかなるものなのか、その定義を、最新の知見のもとに試みた。そして、両情動それぞれが対人的環境ならびに個人にどのような影響を与えるのかという機能について論じることによっても、恥と罪悪感の相異が明確化されたのではないだろうか。最後に、対人的環境において多面的な機能を発揮する恥と罪悪感がいつ頃、どのようにして現出してくるのかということについても、最新の知見を織り交ぜながら、情動発達の主要

な研究者であるLewisのモデルを参照しながら議論した。しかし、恥と罪悪感が対照的に異なる対人的機能を有することを鑑みると、本論のなかで、恥と罪悪感が生涯を通じてどのように発達していくか、またどのように振る舞うのかについて論じることも重要であったかもしれない。筆者の今後の課題として、それを考究していくことをお約束したい。

## 文 献

- Barrett, K. C. 1995 A functionalist approach to shame and guilt. In J. P. Tangen & K. W. Fischer (Eds.), *Self-conscious Emotions: Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. New York: Guilford Press. Pp. 25-63.
- Barrett, K. C., Zahn-Waxler, C., & Cole, P. M. 1993 Avoiders versus amenders: Implications for the investigation of guilt and shame during toddlerhood? *Cognition and Emotion*, 7, 481-505.
- Batson, C. D. 1991 *The altruism question: Toward a social-psychological answer*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Benedict, R. 1946 *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. Boston: Houghton Mifflin.
- Bertenthal, B. I. & Fischer, K. W. 1978 The development of self-recognition in the infant. *Developmental psychology*, 14, 44-50.
- Bischof-Coehler, D. 1988 On the connection between empathy and ability to recognize oneself in the mirror. *Schweizerische Zeitschrift für Psychologie*, 47, 147-159.
- Bischof-Coehler, D. 1994 Self-objectification and other-oriented emotions: Self-recognition, empathy, and prosocial behavior in the second year. *Zeitschrift für Psychologie*, 202(4), 349-377.
- Campos, J. J., Campos, R. G., & Barrett, K. C. 1989 Emergent themes in the study of emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology*, 25, 394-402.
- Darwin, C. 1965 *The expression of the emotions in man and animals*. Chicago: University of Chicago Press.
- Eisenberg, N. 2000 Emotion, regulation, and moral development. *Annual Review of Psychology*, 51, 665-697.
- Eisenberg, N., & Fabes, R. A. 1991 Prosocial behavior and empathy: A multimethod, developmental perspective. In P. Clark (Ed.), *Review of personality and social psychology*. Vol. 12. Newbury Park: Sage. Pp. 34-61.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. 1975 *Unmasking the face: A guide to recognizing emotions from facial clues*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall. 工藤 力 (監訳) 1987 表情分析入門—表情に隠された意味を探る—誠信書房

- 遠藤利彦 1995 乳幼児期における情動の発達とはたらし 麻生 武・内田伸子（編）講座生涯発達心理学 2 人生への旅立ち—胎児・乳児・幼児前期— 金子書房 Pp. 129-162.
- 遠藤利彦 1996 喜怒哀楽の起源—情動の進化論・文化論— 岩波書店.
- Ferguson, T. J., Stegge, H., & Damhuis, I. 1990 Guilt and shame experiences in elementary school-aged children. In R. J. Takens (Ed.), *European perspectives in psychology*. Vol. 1. New York: Wiley. Pp.195-218.
- Ferguson, T. J., Stegge, H., & Damhuis, I. 1991 Children's understanding of guilt and shame. *Child Development*, **62**, 827-839.
- Fischer, K. W. & Tangney, J. P. 1995 Self-conscious emotions and affect revolution: framework and overview. In J.P.Tangney Tangney & K.W.Fischer (Eds.), *Self-conscious Emotions: Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. New York: Guilford Press. Pp.3-22.
- Frank, R. H. 1988 *Passions within reason: The strategic role of the emotions*. New York: Norton.
- Frijda, N. 1986 *The emotions*. New York: Cambridge University Press.
- Gehm, T. L., & Scherer, K. R. 1988 Relating situation evaluation to emotion differentiation: nonmetric analysis of cross-cultural questionnaire data. In K.R.Scherer (Ed.), *Facets of Emotion: Recent Research*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Izard, C. 1991 *The psychology of emotions*. New York: plenum Press. 莊巖舜哉（監訳）1996 感情心理学 ナカニシヤ出版
- Izard, C., & Malatesta, C. 1987 Perspectives on emotional development: I. Different emotions theory of early emotional development. In J.Osofsky (Ed.), *Handbook of infant development*. 2nd ed. New York: Wiley. Pp.494-553.
- Johnson-Laird, P. N., & Oatley, K. 2000 Cognitive and social construction in emotions. In M.Lewis & Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions*. 2nd. Ed. New York: Guilford Press. Pp. 458-475.
- Kagan, J. 1984 *The nature of the child*. New York: Basic Books.
- Keltner, D., & Buswell, B. N. 1996 Evidence for the distinctness of embarrassment, shame, and guilt: a study of recalled antecedents and facial expression of emotion. *Cognition and Emotion*, **10**, 155-171.
- Lewis, H. B. 1971 *Shame and guilt in Neurosis*. New York: International University Press.
- Lewis, M. 1992 *Shame: The Exposed Self*. New York: Free Press. 高橋恵子（監訳）1997 恥の心理学 ミネルヴァ書房.
- Lewis, M. 1999 The role of the self in cognition and emotion. In T.Dalgleish & M.Power (Eds.), *Handbook of Cognition and Emotion*. Chichester: John Wiley & Sons. Pp.125-142.
- Lewis, M., Alessandri, S. M., & Sullivan, M. 1992 Differences in shame and pride as a function of children's gender and task difficulty. *Child Development*, **63**, 630-638.
- Lewis, M., Sullivan, M.W., Stanger, C., & Weiss, M. 1989 Self-development and self-conscious emotions. *Child Development*, **60**, 146-156.
- Mascolo, M. F., & Fischer, K. W. 1995 Developmental transformation in appraisals for pride, shame, and guilt. In J.P.Tangney & K.W.Fischer (Eds.), *Self-conscious Emotions: Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. New York: Guilford Press. Pp. 64-113.
- Niedenthal, P. M., Tangney, J. P., & Gavanski, I. 1994 "If only I weren't" versus "If only I hadn't": distinguishing shame and guilt in counterfactual thinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 585-595.
- Olthof, T., Schouten, A., Kuiper, H., Stegge, H., & Jennekens-Schinkel, A. 2000 Shame and guilt in children: Differential situational antecedents and experiential correlates. *British Journal of Developmental Psychology*, **18**, 51-64.
- Ortony, A. & Turner, T. 1990 What's so basic about basic emotions? *Psychological Review*, **97**, 315-331.
- Pnaccione, V. F. & Wahler, R. G. 1986 Child behavior, maternal depression, and social coercion as factors in the quality of child care. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **14**, 263-278.
- Plutchik, R. 1980 A general psychoevolutionary theory of emotion. In R.Pultchik & H.Kellerman (Eds.), *Emotion: Theory, research, and experience*. Vol.1. New York: Academic Press. Pp.3-33.
- Rehm, L. P. & Carter, A. S. 1990 Cognitive components of depression. In M. Lewis & S. M. Miller (Eds.), *Handbook of developmental psychology*. New York: Plenum Press. Pp. 341-351.
- Scherer, K. R. 1986 Vocal affect expression: A review and a model for future research. *Psychological Bulletin*, **99**, 143-165.
- Stipek, D., Recchia, S., & McClintic, S. 1992 Self-evaluation in young children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **57** (1, Serial No.226).
- Tangney, J. P. 1993 Shame and guilt. In C. G. Costello (Ed.), *Symptoms of Depression*. New York: Wiley. Pp.161-180.
- Tangney, J. P. 1995 Shame and guilt in interpersonal relationships. In J. P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious Emotions: Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. New York: Guilford Press. Pp.114-139.



- Tangney, J. P. 1999 The self-conscious emotions: shame, guilt, embarrassment, and pride. In T. Dalglish & M. Power (Eds.), *Handbook of Cognition and Emotion*. Chichester: John Wiley & Sons. Pp. 541-568.
- Tangney, J. P., Miller, R. S., Flicker, L. & Barlow, D. H. 1996 Are shame, guilt, and embarrassment distinct emotions? *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1256-1269.
- Tangney, J. P., Wagner, P. E., Fletcher, C., & Gramzow, R. 1992 Shamed into anger? The relation of shame and guilt to anger and self-reported aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 669-675.
- Wicker, F. W., Payne, G. C., & Morgan, R. D. 1983 Participant descriptions of guilt and shame. *Motivation and Emotion*, **7**, 25-39.
- Zahn-Waxler, C., & Radke-Yarrow, M. 1990 The origins of empathic concern. *Motivation and Emotion*, **14**, 107-130.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., Wagner, E., & Chapman, M. 1992 Development of concern for others. *Developmental Psychology*, **28**(1), 126-136.